

■メンデルスゾーン／交響曲 第3番 イ短調 Op. 56「スコットランド」

1829年のスコットランドへの旅のなかで、フェリックス・メンデルスゾーン（1809-1847）の情感を最も強く揺さぶったのはエディンバラにある朽ち果てたホルレード城とそのとなりにあった礼拝堂だった。悲劇の女王メアリー・スチュアートゆかりの地を目にして、家族に書き送った手紙には「礼拝堂にはもう屋根がなく、草や蔦が茂っています。そしてあの朽ちた祭壇でメアリーがスコットランドの女王に即位したのです。私は今日、ここでスコットランド交響曲の開始部分を思いつきました」と認めている。だが、この交響曲ができあがるまでにはかなりの年数を要した。完成は1842年。スコットランド旅行から13年ものちのことだった。

そこからも想像されるとおり、交響曲第3番は改訂を繰り返しながら、じつに緻密な構成をもった作品に仕上げられている。4つの楽章すべてがソナタ形式で書かれ、すべての主題が第1楽章冒頭の序奏から導き出されている。さらに4つの楽章がひとつながりに演奏され、みずみずしい情感をたたえつつ、音楽が大きな輪郭を描いていく。交響曲の名にふさわしく、最初の着想をじっくりとあたためて練り上げた充実した曲である。

第1楽章はアンダンテ・コン・モートの序奏で幻想味たっぷりに始まり、巧みな流れでアレグロ・ウン・ポコ・アジタートの主部にはいる。弦楽器の弱音に導かれる第1主題にはどこかしら、スコットランド風の哀愁が感じられる。クラリネットの呈示する第2主題も愛らしい。ここでは伴奏に第1主題のモチーフが応用されている。第2楽章ヴィヴァーチェ・ノン・トロポはスケルツォ風の音楽。スコットランドの雰囲気が濃厚に表れている。第3楽章アダージョは古城や廃墟の多い荒れ果てたスコットランドの肖像。メランコリックな、さびしさの漂う第1主題と、クラリネットによる第2主題が回顧的な雰囲気を生み出している。その気分を完全に吹っ切るように開始される第4楽章アレグロ・ヴィヴァチッシモのフィナーレは、元気のいい楽想が展開される。展開部の対位法的な楽曲構成がよくできている。アレグロ・マエストロ・アッサイのコーダはバグパイプの音楽を模したといわれるスコットランド民謡風の音楽で高らかに結ばれる。

白石美雪

楽器編成：フルート 2、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2、ホルン 4、トランペット 2、ティンパニ、弦五部

※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。